

## —追悼—

## 見事な一生を過ごされた末元先生

日江井栄二郎



末元先生は学問にも芸術にも非凡で多才な方でした、何事も最高のものを楽しまれたので、現職中は芸術の才が現れるのを抑え、天文学の研究、教育に力をそそがれ、研究にはきびしさがありませんでした。

なにごとでも、その事柄の奥の、またその奥に流れている原理を考察されましたので、末元さんとの話には常に深みがありました。世界の研究者は、末元さんの独創的な研究や含蓄のある考え方に一目置いていました。研究だけでなく、天文学の進むべき方向などについても洞察力と先見の明を持ち、識見の高いお考えを述べられていました。

人の才能を見抜き、その長所をのばすのが巧みでした。多くの弟子を育てました。太陽の分光観測、日食観測、磁場の観測、高空間解像度の観測、バルーン・ロケットによる観測、科学衛星による観測等指導力を発揮され、東京も京都も融合した強力な研究グループによって立派にひきつがれている。

生来、何かを創り上げるのを好まれた。作品は、観測装置や望遠鏡の部品にせよ、船や日常の調度品にせよ、どこかに工夫がこらされていて、出来具合だけでなく、その機能も精妙そのものです。

1957～58年代、元東京天文台の塔望遠鏡を清水実氏と共に、太陽フレア観測用に改良した。ヘリオスコープ装置をつくり、 $3600\text{Å}$ から $7000\text{Å}$ のスペクトルが一度に撮れる大型カメラを自作した。これで撮れたフレアスペクトルを、コンパレータの部品などを集めて作ったマイクロ・ホトメーターで観測した。そしてパルマー線巾から電子密度

を求める「末元の方法」を使い、世界で初めて、分光学的にフレアの微細構造を明らかにした。

1958年スワロフ島日食では、彩層の輝線巾に彩層の厚さの影響がないように工夫された「斜入射法」という新装置でフラッシュ・スペクトルの撮影に成功し、彩層の乱流の研究をされた。この時使った $60\times 40\times 10\text{cm}$ という自動大型カメラの完成が遅れぎみであったので、人見街道を約10km、夏の暑い日を自転車で行き、そこに居た中村義一氏と共にヤスリをかけたり、ボール盤を使ってカメラを作り上げたが、その時の末元さんは実に楽しそうであった。

退官後は、趣味を楽しんでいた。午前中は国立天文台で、カルシウムK線のスペクトルから粒状斑間の輝点の性質を研究し、午後は自宅でコンピュータを駆使して研究のための解析をし、夜は庭に置かれた口径20cmのミードのシュミット・カセグレン望遠鏡で、奥様を記録係にされて共に星の観望を楽しむなど、一日をひとの数倍充実した過ごし方であった。

ハーモニカも吹かれたが、楽譜を見ながらコンピュータに入力し、自分流に音楽をつくり、コンピュータの演奏を楽しんでいた。モーツァルトやベートーベンや、特にシューマンのピアノ曲を好まれた。またコンピュータの1024色を巧みに使いわけ、印象派の絵をもとにして、絵画をつくられた。寝る前には、原書で小説を読んでいた。プルーストとかゲーテを好まれていて、ゲーテの詩を読んでいるところであった。

天才と秀才とを合せ持った方であり、研究には峻厳、弟子教育には寛厳よろしきを得、現実的問題には清濁併せ呑む雅量を持っていた。楽しみつつ為したことが、天文学の研究であり、絵画、音響、物を創ることであったようだ。長年知己であった阿弥陀寺の住職が言はれたように、実に見事な一生を送られた方です。「天輝院釋善王」という戒名からもうかがはれる。合掌